

篠原一男の海外渡航に関する写真資料と論考にみる都市空間への眼差し

正会員○池田一真*1

同 大塚優*2

同 小倉宏志郎*3

同 奥山信一*4

篠原一男 海外渡航 写真資料
言説 都市空間

1. 序 篠原一男は、住宅作品をはじめとした数々の建築作品を発表した建築家であるが、都市や集落についても多くの洞察を残している。篠原は1970年代以降数度の海外渡航をしており、その体験を自身の論考で度々言及している。その内容は、建築や都市に対する篠原の思考を読み解く上で重要であるが、その多くが断片的な記述にとどまっており、訪問地の詳細や渡航行程の全体は明らかになっていない。そこで本研究では、篠原一男の海外渡航で撮影された写真資料と出版された論考を対象¹⁾とし、それらの内容を検討することで海外渡航の行程の全体を明らかにするとともに、篠原の渡航における都市への着眼点や都市空間認識の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 海外渡航の訪問都市とその行程

2-1. 写真資料の検討 写真資料は大半がマウントされたカラーポジスライドである。そのケースには撮影地と思われる都市名や地域名が記録されている場合があり、撮影された各写真の渡航年と都市名を把握できた。写真資料をスキャン、データ化し(図1)、同封されていた訪問地のリスト²⁾の情報を総合することで、各渡航の行程と、都市別の撮影枚数を明らかにした(図2)。

2-2. 出版された論考にみられる都市 資料とした論考(表1)には渡航先の体験に関する描写(以下、体験描写)と篠原の撮影した写真が掲載されている。前節で明らかにした海外渡航の行程を踏まえ、論考における体験描写と掲載写真の渡航年と都市を確認し、それぞれの描写数と写真数を図2に記載した。描写数ではダカール、アビジャンなどの西アフリカの街が、写真の掲載数ではアビジャンが突出しており、次いでニューヨーク、クスコが多かった。

表1 論考リスト

no.	発行年月	書名・雑誌名	論考タイトル	描写数	写真数
1	1973.1	新建築	新しい風景	3	0
2	1974.1	朝日ジャーナル	アクロポリスのある通り	4	2
3	1974.3	芸術新潮	ポローニャの七月の通り	1	1
4	1975.3	新建築	非合理都市と空間機械	11	1
5	1976.4	季刊デザイン	ブラック・アフリカの街で	12	30
6	1976.9	東京工大クロニクル	象牙海岸の街で	5	23
7	1977.1	新建築	第3の様式	9	2
8	1985.3	新建築	歌田祥彦 コンセプト・アビジャン	4	0
9	1988.10	Space Modulator	N.Y.6 番街	1	1
10	2001.2	『超大数集合都市へ』		36	153
11	2006.3	『通りと人影』		8	除外
合計				94	213

図1 写真資料の例

3. 公表された論考にみられる体験描写 本章では海外渡航において篠原の具体的な着眼点を明らかにするために、論考内の体験描写の内容を検討する。

3-1. 体験描写における描写対象 体験描写からは、海外渡航の体験に言及するなかで描写される対象(以下、描写対象)が読み取れる。これらを篠原による着眼点として抽出し³⁾、その内容を検討した(図3)。その結果、【街並み】、【インフラ】、【建物】、【自然】、【人物】の5つに大別することができた。

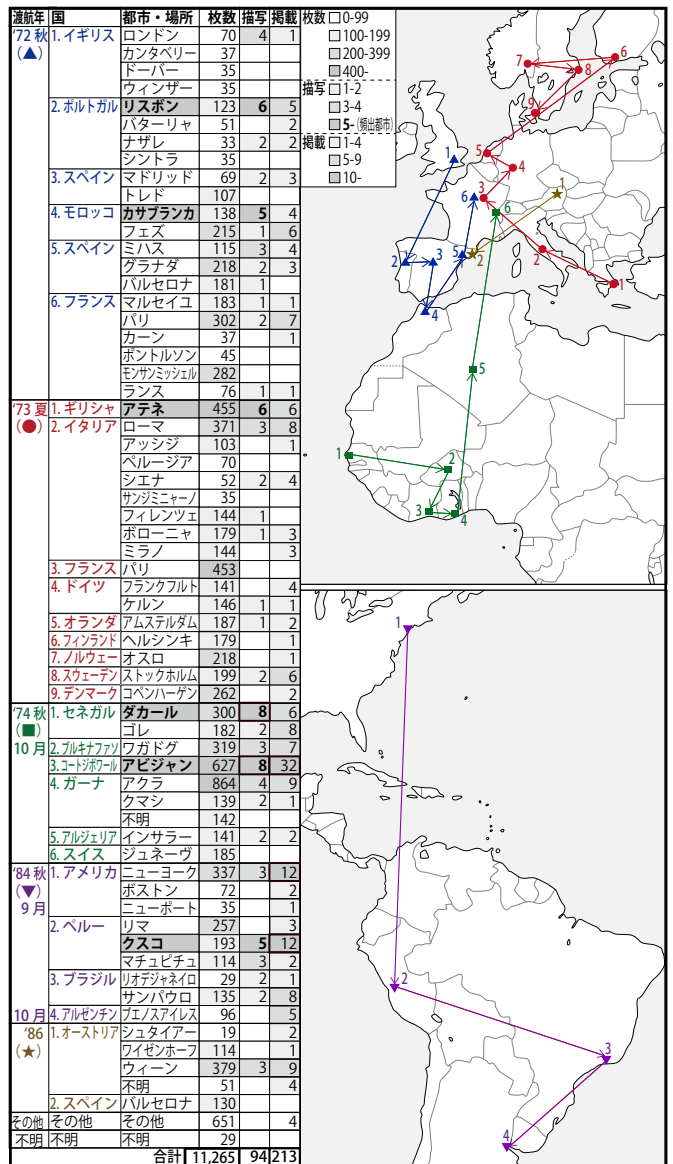


図2 各海外渡航の訪問都市とその行程および論考での描写数と写真の掲載枚数

3-2. 各地域の描写対象の内容とその傾向 前節の内容をもとに、各渡航の描写対象の内容を地域ごとに検討した(図4)。その結果、1972, 73年の欧州および1984年の北米・南米では総じて同様の分布といえるが、1974年の西アフリカでは【街並み】と【インフラ】が減り、【自然】と【人物】が増加していることがわかる。

4. 頻出都市の体験描写と掲載写真 図2において描写数が5以上の都市を頻出都市と位置付け、体験描写と掲載写真の対応が確認できた代表例を示した(図5)。リスボンのように遠景の街並みを捉える視点は、ひとつの典型といえる。また街の近景に関する描写には、カサブランカやクスコのように【建物】〈匿名〉と【人物】〈活動〉の組合せがみられた。また、【建物】については都市ごとに異なる外観の特徴を詳細に捉えており、【人物】についてもその服装や表情といった容姿の描写が地域ごとにみられた。海外渡航を通して、各都市固有の特徴を持つ建物と、その通りに動き佇む人が織りなす風景を、都市の光景として重要視する篠原の都市空間認識の特徴が表れていると考えられる。

5. 結 以上、篠原一男の海外渡航で撮影された写真から渡航の行程を明らかにし、出版された論考の内容を併せ、篠原の都市への着眼点や空間認識の特徴を検討した。その結果、海外渡航において篠原が特に注目した都市名を明らかにした。また、地域に偏りのある着眼点もみられる一方で、匿名建物や人物の活動など一貫した着眼点も見出すことができ、それらが織りなす風景を見つめる篠原の都市空間への眼差しの特徴を捉えることができた。

【街並み】	45	【インフラ】	34	【建物】	73	【自然】	38	【人物】	69
【近景】	32	【道】	24	【匿名】	53	【水面】	10	【活動】	60
【通り】	26	道の形状	12	住居	32	海	7	移動する人	24
【広場】	6	道路の舗装	8	高層ビル	7	ラグーン	3	生活の様子	13
【遠景】	13	階段	4	通りの建物	9	【大地】	17	佇む人	12
街並み俯瞰	5	【交通】	10	教会	4	樹木	10	祭り・イベント	6
現代都市のシルエット	5	モニュメント	5	その他	1	砂漠	5	容姿・表情	5
遠くの家並み	3	【署名】	20	道跡	6	山	2	【交流】	9
		聖堂	6	空	11	【天空】	7	会話	7
		城	4	太陽・月	6	雨	3	握手	2
		その他	5		2				

図3 描写対象の内容

	【街並み】45	【インフラ】34	描写対象				【自然】38	【人物】69				
			【建物】73	【匿名】	【署名】	【活動】						
1972年 欧州	76	12	6	6	6	14	8	7	2	2	11	1
1973年 欧州	52	9	2	8	2	9	8	2			12	
1974年 西アフリカ	83	2	4	5	20	3	13	4			23	8
1984年 北米南米	40	7	1	4	2	10	1	2	2		11	
1986年	8		2		1	2					3	

図4 各地域の描写対象の内容

註1) 写真資料は、本大学の奥山研究室に寄託された、篠原一男の海外旅行で撮影された写真11,265枚を資料としている。また論考は、海外渡航について述べられた11の論考を資料とし、海外渡航の体験描写が記された94の意味段落と、論考に載せられた213枚の写真を検討対象とした。
2) 写真資料には、都市名が訪問順に記載されているリストが同封されていた。
3) 論考内の94の体験描写から259の描写対象が抽出でき、これらを検討対象とした。

- *1 東京科学大学 修士課程
- *2 東京科学大学 助教・工修
- *3 東京科学大学 技術支援員・工修
- *4 東京科学大学 教授・工博

リスボン No.4-3 「非合理都市と空間機械 現象都市にて」 新建築 1975年3月

数日後の夕方、私はリスボンのベレン地区にいた。…
①ふと向こうの樹の梢の形に沿うようにして真白な雲のような、しかし、もっと硬質なものが広がっているのに気づいた。遠い風景のようだ。突然、それが少し離れたリスボンの市内の丘陵の上を埋めている。私の真後から届いている夕陽を真正面を受けて真白に輝いている住宅の群れであることが理解されたとき、私の体のなかを表情しがたい激しい感情が一瞬貫いた。これが〈人の住む〉という光景なのだ。いつも綿延して考え続けている、人が住むということの原光景を私はそこに見た。



1972年秋 ポルトガル・リスボン
遠景：①【街並み】〈遠景〉夕陽に輝く住宅

カサブランカ No.4-6 「非合理都市と空間機械 共時都市にて」 新建築 1975年3月

華やいた、浮き立つような興奮が、フェズからふたたび戻って、ゆっくりと歩きまわったカサブランカの大通りの上で、私をとらえた。①北アフリカ唯一の近代都市のこの大通りはフランス系の現代建築がゆったりと並んでいた。建築家である私にはそれはむしろ日常的な風景であったはずだ。だが、私は明確な理由も見当たらないままに気持が高ぶってきた。②黒いベールで顔を覆った民族衣装の女性たちに出会う。フランス系ヨーロッパとアラブ系アフリカは溶け合わずに、それぞれが明確な輪郭をもったまま、しかも分解できない空間と時間が絞られていた。



1972年秋 モロッコ・カサブランカ
近景：①【建物】〈匿名〉フランスの現代建築
②【人物】〈活動〉民族衣装の女性たち

アテネ No.2-4 「アクロポリスのある通り」 朝日ジャーナル 1974年1月

通りをアクロポリス寄りに選べば、つぎの十字路の左手、①二、三階建ての商店の街なみが挟んだ通りの正面には②北寄りのエレクテオンの背面であるうか、神殿が岩壁の上に現れる。③古い街プラカはアクロポリスの北側直下に広がっているから、プラカのなかのアクロポリス沿いの狭い道は北斜面の地形の等高線を示すように通っていた。④太陽はもう真西に来て通りの隅々まで照らしていた。白あるいは薄黄の民家の壁が輝いて続いていた。⑤道と直交する細い路路の上には荒々しい岩肌があった。⑥女性たちがおしゃべりをしていた背後にも、写真をとって送ることを約束した四人の中学生らしい少女少女のすぐ上にも、②アクロポリスと神殿があった。



1973年夏 ギリシャ・アテネ
近景：①【建物】〈匿名〉フランスの現代建築
②【建物】〈匿名〉アクロポリスと神殿
③【インフラ】〈道〉道の形状
④【人物】〈活動〉女性たち、少女少女

ダカール No.5-4 「ブラック・アフリカの街で ダカールで」 季刊デザイン 1976年4月

①祭の外には現代都市が、正確に言えば現代フランス的な整った都市があった。ダカールの中心インデパンダンス広場の一角に建つアラバホテルの最上階の12階の私の家から見た光景が、私のブラック・アフリカ都市の〈横断〉の出発点であった。…真下のホテル前の黒っぽいアスファルトの広場を、②鮮やかな青の長い上衣をまとい、白いバンタロンをはいた黒人の男性の、平面図に近い小さな映像がゆくりと横切っていく。何でもない現代都市の空間がアフリカの空間に変質した。まだ10時前だが、外は暑そうだ。



1974年秋 セネガル・ダカール
近景：①【街並み】〈近景〉現代都市空間
②【人物】〈活動〉黒人男性の移動

アビジャン No.5-1 「ブラック・アフリカの街で 象牙海岸国」 季刊デザイン 1976年4月

アジャメの市場の裏で、①鮮やかな青や紫のペンキを使っているが、全体では沈んだ美しい調子をもった民家をつぎつぎとたどっていったら、②タムタムの音が聞えた。単調な音だが、現地のタムタムの発信場所を見つけた。通りの向こうの民家にタムタムを打つ一団が大勢の子供に取りまかれて入っていたのが見えた。私も急いでかけつけ、笑ってどうぞというポーズをとる通りがかりの男と一緒に小さな民家の中庭に入った。③タムタムに合わせて、ときどき飛びはねるようにして少女たちが輪になって踊っていた。終わったから先に通りに出て待ちかまえていた私のカメラに、それまで一緒になかにいた子供たち全部がうつっていた。



1974年秋 コートジボワール・アビジャン
近景：①【建物】〈匿名〉ペンキ塗りの民家
②【人物】〈活動〉タムタムの音と踊る少女たち

クスコ No.10-9 「静かな美しさのなかの哀しみ」 超大数集合都市へ 2001年2月

①クスコの家並みの表情は静かに沈んでいた。なんという美しさ。インカ・インディオは蒙古系種族という。遠い昔、その種族は当時地続きのペーリング海峡を経て、南米大陸の果てのフェゴ島にまで到達したという。②衣服の伝統が違うが、日本人とよく似た容顔の人びとに出会う。③スペインの建物の伝統を強く残した家並みに、④この人影が重なると、親しさと哀しみが私のなかで激しく交錯した。



1984年秋 ペルー・クスコ
近景：【建物】〈匿名〉スペイン建築の伝統を残した家並み
【人物】〈活動〉日本人に似た容姿の人々の人影

図5 頻出都市の代表的な体験描写と対応する掲載写真

- *1 Graduate Student, Institute of Science Tokyo
- *2 Assistant Professor, Institute of Science Tokyo, M.Eng
- *3 Technical Support Staff, Institute of Science Tokyo, M.Eng
- *4 Professor, Institute of Science Tokyo, Dr.Eng